備陽史探訪の会２月例会

―沼隈半島の古里―

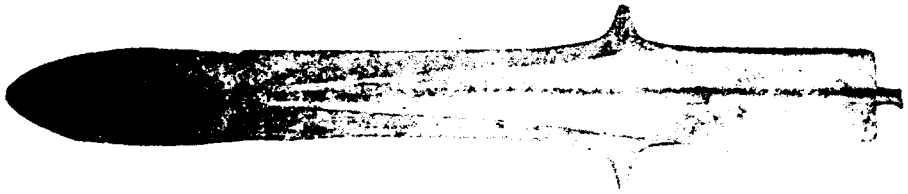
山南の歴史を探る

広島県重要文化財悟真寺阿弥陀如来坐像

講師　田口義之

平成１２年（西暦２０００年）２月２０日実施

備陽史探訪の会



日枝神社所蔵の平型銅剣
全長４５センチ、茎幅５センチ、厚さ２ミリ

山南の歴史

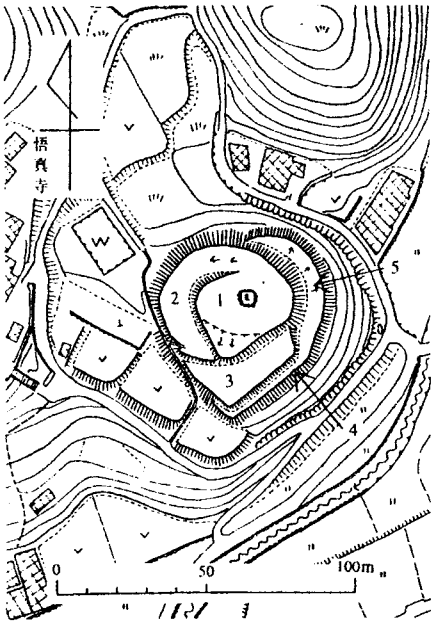
田口義之

地名の由来

山南の地名は、沼隈半島の中心をなす馬背山山塊の南に位置することからその名が付いたといわれる。周辺の地名を見ると、半島のほぼ中央に「山田（現在の熊野町）」があり、その北に山北、南に山南がある。古代半島の中央に位置する山田盆地が「山」と呼ばれ、その南北をそれぞれ「山北」「山南」と称したと考えてよいであろう。「山」は「邪馬台国」の「邪馬」に通ずる非常に古い地名である。

古代の山南

この地は、南に開けた谷筋だけに古くから人類の営みがあったと考えられるが、現在までに発見された遺跡は少ない。縄文時代の遺跡は確認されておらず、弥生時代の遺跡も発掘によって確認されたものはない。ただし、弥生期に入ると点々と遺物を出土する場所が見付かっている。中でも現在日枝神社の神宝として伝わっている弥生時代の平形銅剣は注目される。この銅剣は本来神社東方の巨岩の下から出土したものと考えられており、この地に銅剣を祭祀の対象とした人々の集団が存在したことを物語っている。



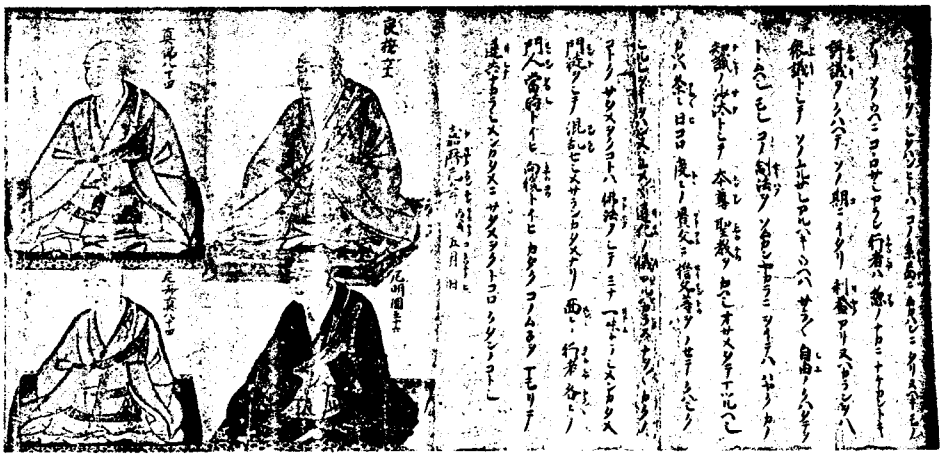
桑田氏の居城と伝わる丸山城跡典型的な土居形式の山城で起源は古いと考えられる

中世の山南

山南の古代史を物語る遺跡や史料はきわめて少ない。そのため奈良から平安にかけての歴史もほとんど不明である。したがってこの地の歴史を史料に基づいて述べる場合は、次の鎌倉時代からになる。

この地は瀬戸内海に面した地であっただけに当初は平家の勢力が強く及んでいたと考えられている。その傍証の一つが山南の一支谷、通称「平家谷」と呼ばれる横倉である。だが、鎌倉幕府の開設とともにこのことはかえって幕府の力が強く及んでくる原因ともなった。幕府は平家与党の人々の領地を平家没官領として没収し、かわって東国の御家人たちを地頭としてそれぞれの地に入れたからである。

山南の地頭に就いては長らく不明であったが、近年の厳島反故裏経文書の解読によって執権北条氏の一族大仏氏が鎌倉後期にはその地位にあったことが判明した。北条氏の一族は全国の要所を領有しており、この地も内海航路の要所として北条氏が確保したものと考えられる。ただ、同文書によると、大仏氏はこの地に直接入部しておらず、実際には同家の被官や備後守護であった長井氏が「請所」として年貢の収納を請け負っていた。



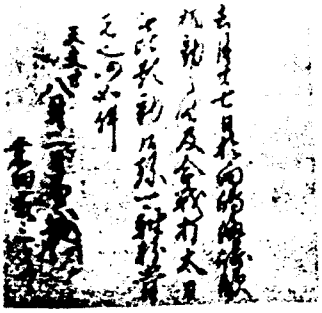
光照寺蔵「絵系図」嘉暦元年銘

真宗の拠点光照寺

山南の歴史を語る場合避けて通れないのは浄土真宗の西国布教の最初の拠点となった光照寺の存在である。同寺は寺伝によると宗祖親鸞の高弟であった明光が師の委嘱を受けてこの地に下向し、光照寺を創建。以後その継承者によって真宗の教線を拡大し、戦国時代には山陰山陽で数百ケ寺の末寺を擁する大勢力となったという。光照寺が近世初頭には浄土真宗の一大勢力となっていたことは間違いないが、その初期の様子については必ずしも明らかでない。そもそも明光は鎌倉の最宝寺を開いた人物で、その教義も親鸞の教えとはかけ離れたものであった。すなわち明光派の教義は「絵系図」「名帳」に名前や肖像を掲載されることが往生の要諦であり、師弟の相承を重んじたものであった。この明光派の光照寺が本願寺と接近するのは鎌倉時代末期、本願寺の存覚がこの地に滞在したことに始ると考えられ、戦国期の天文年間には本願寺の証如より直末同様の待遇を受けている（「天文日記」）。光照寺と鎌倉の最宝寺の関係は江戸時代初期に至るまで本末の関係を持ち、光照寺が本願寺門跡の「連枝」近江本行寺の末寺になるに及んで関係を絶った。

なお、広島県西部は真宗の信者が多く「安芸門徒」として知られているが、これは光照寺の末寺に当たる三次の照林坊が県北から山陰にかけて教線を拡大し、その末寺で光照寺からみると又末寺にあたる甲田町の高林坊が安芸の拠点寺院となって教義を広げていったことによる。すなわち、安芸門徒の起源は備後山南の光照寺にあるのである。

去月廿七日於向嶋海崎
敵相勤候時及合戦打太
刀無比類動候弥可軸粉
骨者也仍如件
天文廿
八月二日　義正（花押写）
桑田藤三とのへ

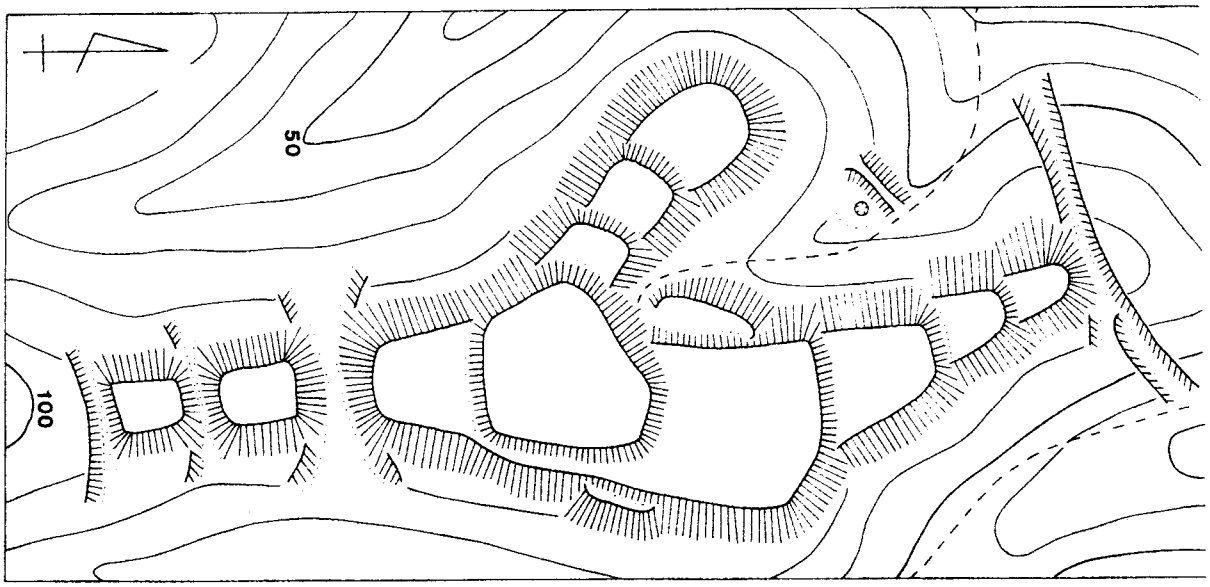


桑田家文書渋川義正感状写

九州探題渋川氏

鎌倉幕府の滅亡によって北条氏が滅んだ後、この地は足利氏の一門渋川氏の支配下に入り、戦国時代を迎える。渋川氏は足利氏にきわめて近い一族で、南北朝時代に足利二代将軍義詮の正妻を出したことから室町幕府で大きな勢力を持った武門である。山南の領有は南北朝の初期にさかのぼると考えられるが、その後同氏が九州探題を世襲したことから京都と九州を結ぶ中継地として備後の所領が大きな意味を持った。渋川氏の備後における拠点は三原市の八幡町一帯であるが、山南地域の支配にも力を注いだようで、浄土宗の悟真寺は同氏の外護の下に栄え、渋川氏の山南支配の拠点としての意味を持っていた。

渋川氏が本格的に備後に拠点を占めるようになるのは戦国期のことである。すなわち、九州を没落した渋川義陸は本拠を三原の八幡に置き、改めて父祖伝来の備後の所領を支配しようとした。山南もまた義陸・義正・陸景と続く渋川三代がその支配に意欲を見せたところで、桑田氏や岡本氏などの在地の土豪はその被官として同氏の山南支配の一翼を担った。だが、渋川三代の治世も天正元年（一五七二）幕を閉じた。同年に没した陸景には子がなく、当時安芸・備後の太守となっていた毛利氏がその存続に冷淡であったためである。



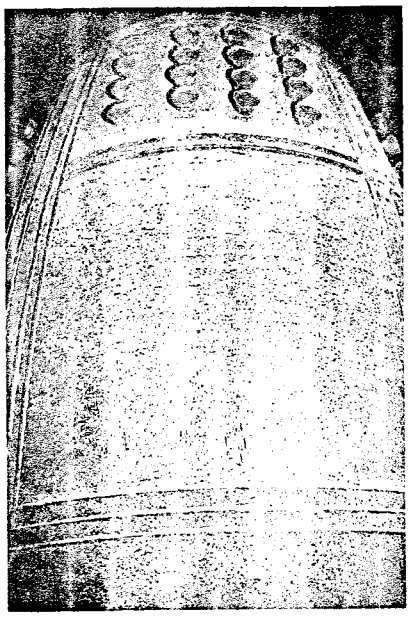
桑田氏の居城と伝える何鹿（いかづか）城跡

山南の土豪と山城

以上述べてきたように、この地方の領主権者は、鎌倉時代の北条氏から、室町戦国期の渋川氏、その後の毛利氏と変遷を繰り返してきた。しかし、実際に村作りを行い、在地に勢力を持っていたのは「土豪」或いは「地侍」と呼ばれた地域の実力者たちであった。

山南地方の土豪として最初に現れるのは箱田氏であった。同氏は平家の末葉と伝え、山南の中央に森脇山城を築き、戦国時代の初頭まで勢力を持った。また、矢栗城主と伝える工藤氏も浄土寺文書に姿を現し、古くより在地の有力者として力を持っていたようである。

戦国時代、渋川氏がこの地の支配を強めると、その被官として力を伸ばしていったのが、以後近代に至るまで地域に大きな影響力を維持した桑田氏であった。桑田氏は伝承によると九州の名門大友氏の一族と伝え、何鹿城の桑田氏、丸山城の桑田氏は共に天文年間、相次いでこの地に来住して山城を構えたという。ただし、この伝承が真実を伝えたものであるかどうかは検討が必要である。史料の上での桑田氏の初見は、天文十六年（一五四七）の渋川義正宛行状で、桑田藤三は渋川氏から山南の内で給地を宛行われている。以後、桑田文書によると、桑田氏は渋川氏や小早川氏と主従関係を結んでいたことが分かり、渋川氏や小早川氏の下にあって勢力を拡大していったことが判明する。丸山・何鹿の両城はこの桑田氏の居城と伝え、丸山城は土居形式の山城として、何鹿城は戦国期の山城としていずれも典型的な姿を今に伝えている。



光照寺銅鐘
慶長18年福島正則が
代官岡島美作守に命じ
て鋳させたもの

近世の山南

慶長五年（一六〇〇）の関が原合戦によって毛利氏が防長二国に移封されると、芸備には福島正則が入部し、この地方にも本格的な「近世」がおとずれる。福島氏の治世は厳格な検地を実施するなどきわめて厳しいもので、この結果芸備地方には近世的な村落秩序が形成されていった。ただし、福島氏の政治は多分に戦国の遺風を残したもので、領内の各所に支城が構えられ、各郷村には福島氏の重臣が「代官」として居住し、城郭並みの陣屋を構えて支配に当たった。山南地方の場合も、正則の重臣岡島美作守が代官として来住し、検地を実施するなど厳しい支配にあたっている。

福島氏の治世で注目されるのは、山南地方の特産品「備後表」の改良である。備後表は室町時代より備後の特産品として知られていたが、この時代、董野の長谷川新右衛門が「中継ぎ表」の製法を開発し、生産量が飛躍的に増大した。中継ぎ表はそれまでの「引き通し表」で捨てていた短い「い草」を途中で継ぐことによって畳表に使用できるようにしたもので、現在の畳表の原型となったものである。福島氏もこの畳表の改良には熱心で、新右衛門は岡島美作守によって士分に取りたてられている。

江戸時代、水野・松平・阿部歴代の福山藩主は備後表を「献上表」として将軍に献上することを例としたが、それは福島氏の先例を踏襲したものであった。

資料①光照寺縁起（第一七世祐然筆）―『備後光照寺』より―

縁起

備後州、沼隈郡、山南郷、金明山、光照寺者、人王八十五代後堀川御宇、安貞元丁亥歳、相州鎌倉最寶寺住持、明光上人所見開創也、明光者源頼朝卿猶子、而藤原氏、天児屋根命廿一世苗裔小德冠中臣御食子卿長子、鎌足玄孫、左大臣右大將従一位内麻呂公五代後胤泉州太守季平六代孫、頼康第四男也、宿習所發、知文而剃除鬢髮、志學而拳登台嶺、鑽仰積功、覩錬累德、罩于壮年屏居相州、自爾永絶交於塵縁、專思於覺路、建久庚辰暦、征夷大將軍源頼朝卿、深ク信受佛乘、幸ニ寄附蔵地、起立梵閣、号御蔵山最寶寺、延請明光、講經唱導侯伯士庶帰慕敬崇相似タリ涓流朝巨海矣、光有恒病、諸謂聖經演利樂、時爐澆香、機感羸劣、四乘八教難解難入也、時ニ尋捜婆藪本論釋公註釋、誠是度沃興世之正說、最勝極妙之寶田、一乘究竟之極談、速疾圓融之金言、時機純熟之真教、廣闡淨利、遠ク導群盲之妙手也、但恨言不可題筆點、意趣絶推知、造次思之、顛沛思之、寝席不安、療齋無味、一日有客云、源空和尚上足善聖人、淨教專修之明師、他力大信之宗匠也、可謂非大哀曠濟拔滯溺之沈流無極悲心拯昏迷之失性之仁也哉矣、今竄居越後國、容參彼師光聆客語敬感慇懃、承元二歳華成中旬、詣聖人淨室、言白、預雖置懐於樂邦、稍愁弗察註文、希惠指麾疏決也、聖人曰、大聖實利有救強剛二機難化三病憑難思弘誓帰利他信海、矜哀無蓋度斯度彼圓融至德嘉号、転悪成德、正智難信金剛信樂除疑獲證眞理也、爾者凡小易修妙行、愚鈍易往捷經、一代教旨無如是之特能無德号、慈父能生因、闕無光明、悲母所生縁、乖能所因縁、雖可和合非信心業識、無到光土真實信業識、斯則為内因光明名父母、斯則為外縁、内外因縁和合、得證報土真身、故宗師言、以光明名号、攝化十方、但使信心求念云、眞宗回遇云、念佛成佛真宗応知親為口授、謾勿出唇、云々、信受稟承如瀉瓶水、悲喜交流、

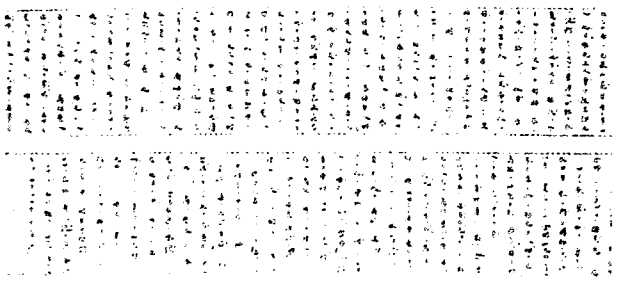


図4―14　『金明山畧縁起』（巻子本）

仰師教厚恩也矣、夙緣多幸、始入專修之秘扃、一念大利、即得往生、住不退転、平業成之奥頤、都得骨髄、歡喜充心、踊躍溢身、爾来師資遊履常州、時到機調、四衆信伏、八部順仰、聖人曰、予念弘法於片西、仁往到遂志、不能固辞、亦所自願也、于茲光畫自像一幀、而爲傳寫爾信請師染筆許容書於若我成佛、十方衆生、称我名号、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虚、衆生稱念必得往生真文、更書壽像面前之字、叉像左方俾為明光書六字寶号、賜於是已矣、建保丙子歳、護持此書、離座下、来當国単勤浄業、洪弘專修、四方伏帰如加風於艸、開創浄宇、住持十有餘年也、是此當寺之濫觴也矣、爾時傳附聖師之口決於第二世明空即明光之息也光帰花洛、從安貞元丁亥首夏下旬不例、同年五月十六日辰名息絶畢ヌ時二年六十有四、葬東山鳥部或曰依遺命納典籍遺骨於當寺也野遐邇緇素、断腸泣涙、不遑羅縷所上二記之明光上人真影者、光之息有良誓者讓與乎、彼誓之後孫暦世号寶田院、崇敬真影即當寺ノ末葉也、然憑光之餘裔、自大矯倣、不随順當寺之規則發憤持真影出奔裏方依之當山之重寶欠其一可悲之甚キ者也

第三世明尊、此時建武三年、存覚上人下向當寺、因明尊之願望三流八幅之繪傳、以本傳指圖畫工者法眼隆圓也、第四世教空、筑紫探題大友宿禰義直者、明光後胤也、所以帰投明尊、剃髪相承空即是色、依教空、欣慕、存覚上人ノ製作歩船抄、第五世教願、依此願爲選択註解抄両書見浄傳目録也第六了空、第七世賢祐、第八世祐信、第九世祐永、第十世祐尊、第十一世祐善權大僧都、第十二世祐岸、第十三世祐恢北堂者准如上人御孫、河内願證寺之息女也第十四世祐旋權大僧都、第十五世祐觀、第十六世祐海寶暦四甲戌正月十四日十八歳而寂祐然清水中納言殿之男、寶暦七丁巳四月入院、于時九歳、實石州銀山清水一之右衛門子也

資料②『沼隈郡誌』―仏閣編、古城主編より―

終南山

中國檀林

悟眞寺 浄土宗 知恩院末

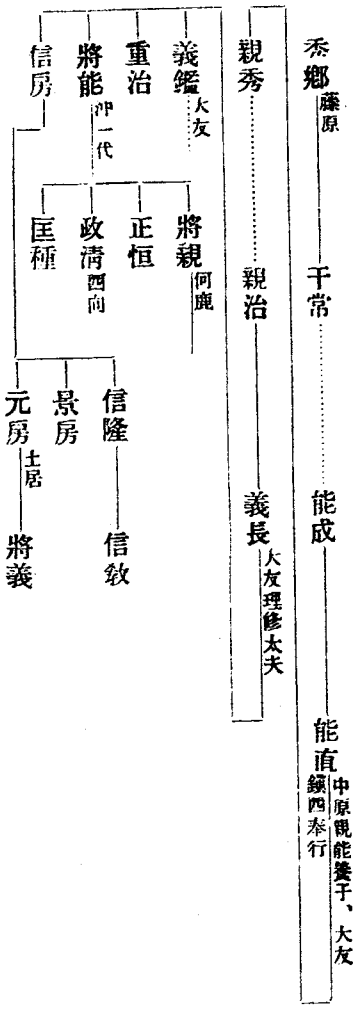
本尊は阿彌陀如來、開創由緒左の如し。

往昔は光明院と名けて天台宗なりしが人皇八十六代、四條院の嘉禎三丁酉歳本宗大三祖記主禪師良忠大和尚筑後國善導寺に下り第二祖正宗國師に謁し浄土宗の奥旨を相承し翌四年同州より歸關の砌當院に留錫し浄土の信徒を教化し寺を浄土宗に改む。而して相州鎌倉に歸り光明寺に於て遷化す。尋て良惠惠俊の二代を經て後無住なりしが延文二丁酉歳鎌倉光明寺七世の主聖譽上人三祖禪師の遺跡たるに依つて鎌倉より下り當寺を再興す此時唐の終南山に模擬して終南山光明院悟眞寺と公稱す。此頃兩備藝三國の探題職御調郡八幡の城主薗川佐兵衛佐聖譽上人に歸依し該父浄榮大居士の位牌を納め供養料として古田七畝歩境内並に畑五段歩山林一丁歩免税せられ其他浄財を投じ諸宇伽藍を營繕し寺門是より盛にして中國檀林と稱す、後長譽房譽心譽乘譽傳譽を經て寺勢漸く衰頽し享祿二年より元亀三年まで四十三年間本住職なく泰譽・覺譽・繁譽の三人尋て看住す。茲に天文五丙申歳毛利の麾下大友大夫丹波の桑田郡より當庄に轉住し姓を桑田と改め當郷を領有す依て當寺を檀寺とし獨力にて伽藍を修繕し延文の舊制に復せり檀戸も此の時より繁榮せり、慶長五庚子歳當寺十一世感龍代毛利家封を削られ福島左衛門太夫入國す檀地して前記の除地を没收し僅に堂敷貳畝貳拾歩山林壹畝歩を殘す後藤讃九岸傳知を經て當寺十五世存國の代元祿十三年領主松平伊豫守より當寺の緣由を徵す仍て前記の旨を進達す尋で教譽・願譽・宜譽・性譽を經て廿一世眞譽の代安永四乙未歳領主阿部家より獨禮格を被仰付後嚴譽・凡譽・梁譽を經て二十五世琢譽の代安政六巳未歳華頂御殿より御好息成を蒙り御紋繪符等御免あり又領主阿部家の三主巡國の都度當寺に休泊す仍て灯燈幕に領主の紋を付るを免す右最初開山より前住察譽に至るまで凡て廿六代嘉禎三年より明治十二年まで六百四十三年概略如此。

本堂・觀音堂・地藏堂は寛延二年再建、山門は天文五年、庫裏は安政五年の改築、鐘樓は左甚五郎の作と傳ふるものを明治十一年能登原寶大寺より移建せしもの、釣鐘は明治十一年三月の再鑄、現住は藤井了嚴、檀徒三二六戸。

山南村悟眞寺

桑田系圖



資料③桑田家文書（広島県史古代中世資料編Ⅳより）

桑田文書

一　澁川義正宛行狀

山南郷田中新次郎給地反錢夫錢等

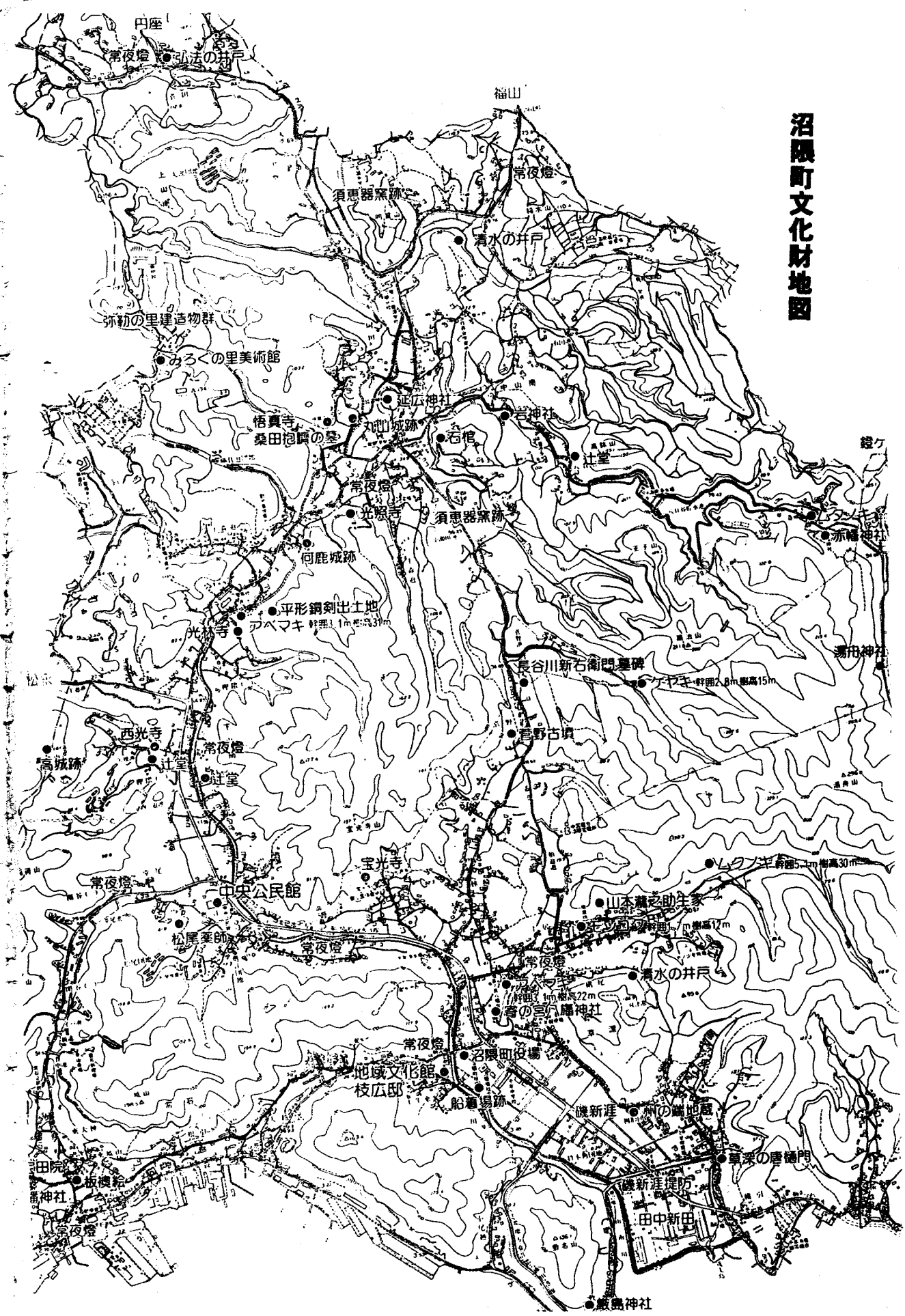
山南之郷（備後沼隈郡）田中新次郎給地之事、如手次遣候、但反錢夫錢之事其外諸役等、守先例可相勤者也、謹言、

天文十六
十一月十日　　義正（花押）

桑田藤三とのへ

備陽史探訪の会事務局
〒720-0824
福山市多治米町 5-19-8
TEL (0849) 53-6157

沼隈町文化財地図


円座
常夜燈
弘法の井戸
福山
常夜燈
須恵器窯跡
清水の井戸
弥勒の里建造物群
みろくの里美術館
延広神社
岩神社
悟真寺
桑田抱月の墓
丸山城跡
石棺
辻堂
常夜燈
光照寺
須恵器窯跡
何鹿城跡
赤幡神社
平形銅剣出土地
光林寺
アベマキ 幹囲1.1m 樹高31m
長谷川新右衛門墓碑
ケヤキ 幹囲2.8m 樹高15m
湯田神社
松永
西光寺
常夜燈
高城跡
辻堂
辻堂
宝光寺
ムクノキ 幹囲5.1m 樹高30m
常夜燈
中央公民館
山本藏之助生家
モッコク 幹囲1.7m 樹高12m
松尾薬師
常夜燈
常夜燈
清水の井戸
ムクノキ 幹囲1.1m 樹高22m
青の宮八幡神社
常夜燈
沼隈町役場
地域文化館
枝広邸
船着場跡
磯新涯
州の端地蔵
草深の唐樋門
磯新涯提防
田中新田
田院
板櫂鈴
神社
常夜燈
厳島神社

スケジュール・見学地の概要

9:00 福山駅前発(鞆鉄バス『常石境が浜』行き乗車)

|【大人片道 500 円】

9:30 天神山バス停下車

9:45 山南小学校

○石棺……古墳時代後期の石棺と考えられているが、江戸時代の工作物との説もある

10:10 天神山延広神社

○石鳥居……町内で一番古い明神型の石鳥居で、「元和 2 年(1616)8 月、山南村総氏子中」の銘がある。

10:30 丸山城跡

○丸山城跡…戦国時代後期にこの地に勢力を持ったと伝える桑田氏の居城跡で、低い丘の上に輪郭式に曲輪が残る。桑田氏は天文年間に姿を現し、当初この地の領主渋川氏の被官であったが、天正元年の渋川氏の滅亡後、小早川氏に属し、付近一帯の豪族に成長した。丸山城跡は、土居形式の山城でその起源は中世前期にさかのぼると考えられる。

11:00 浄土宗悟真寺

○悟真寺……延文 2 年(1357)鎌倉光明寺の聖誉上人の再興と伝え、室町時代この地の領主渋川氏の保護を受け栄えた。寺蔵の木造阿弥陀如来坐像は室町初期の作である。

○桑田抱膝の墓…抱膝は江戸後期の備後を代表する狂歌師で著書に『阿伏兎土産』等がある。

12:00 光照寺(昼食)

○光照寺……中国地方における浄土真宗最初の道場で、寺伝によれば宗祖親鸞の高弟明光によって創建され、全盛時には備後・備中・安芸・石見・出雲・長門六カ国に 371 ヶ所の末寺を擁した。

○光照寺山門・鐘楼…慶長末年の建立と伝えられ県重文に指定されている。

○光照寺梵鐘…慶長十八年(1613)9月、福島正則によって寄進されたもので、和鐘と朝鮮鐘の特徴を兼ね備え県重文に指定されている。

13:30 何鹿城跡

○何鹿城跡…森脇山城とも言い、天文年間、丹波桑田郡からこの地に入ったという桑田氏が土地の豪族箱田氏を追い落として居城としたという。比高70㍍の典型的な階段式山城で曲輪・堀切などが残る。

14:30 日枝神社

○平型銅剣出土地…日枝神社の神宝として伝わる弥生時代の平型銅剣は神社東方 100 メートルの「石かぶとの窟(夫婦岩)」から出土したという。

15:30西光寺

○西光寺の梵鐘…天文 13 年(1544)6 月、大内義隆が厳島神社に奉納したもので、明治初年西光寺の什物となった(県重文)。

16:00 鞆鉄バス『矢縄』バス停・解散(バスは 20 分ごとにあり、福山まで約 30 分)